

被災地の現状を見つづけること あいのままの被災者の思いを受け止めること

全労連 岩手被災地ボランティア派遣レポート — その② (前号から続き)

ボランティア二日目の8月30日。この日は末崎町(細浦)にある「川原冷蔵工場」の側溝の泥だしに参加。ボランティアセンターから車で海岸線沿いを移動。道すがらの光景は分別された瓦礫の山と更地になった土地、ところどころ解体が手つかずに残った建物も。「復興」どころか「復旧」すら見えないというのが率直な印象だったが、それでも5月当初に来た人はずいぶんと「片付いた」という。その言葉に少し励まされた。

地元の人々との連携を

この日の主な活動内容は、側溝に溜まった泥やごみを取り除き、ごみを分別、土嚢をつくるなどの作業。私たち全労連のボランティアは15名(午後は6名のみ。13名は前日からの継続作業)、同じ作業をトヨタグループ15~16名のボランティアと一緒にいった。

はじめに溝いっぱい埋まった泥をかき出してまわりに積み上げ、雨で流れないように土嚢づくりをはじめ。指示系統がないため、作業の全体像がイメージできず、また炎天下のため休憩を挟みながらの作業は思ったほど進まない。その後、業者が来て「泥とごみを選別すれば、あとは重機で運び出してくれる」と聞き、初めの段階から意思疎通ができていれば、もう少し作業効率を上げられたのでは…と悔やまれた。ボランティアにあたっては地元の人々との意思疎通と連携が欠かせないと改めて実感した。



被災者の思いを聞く

川原冷蔵工場の社長さんが、このボランティア受け入れと休憩所の提供をしてくれた。休憩所は、流されずに残った工場の休憩所で、2階部分の壁にも津波の跡がくっきりと刻まれていた。工場の冷蔵庫は津波に破壊され、廃棄した魚・水産加工品は河原冷蔵だけで3,500トン、この付近全体では50,000トンにもなったという。捨てるための穴を掘って埋めた悔しさを語る社長さんに、かける言葉が見つからなかった。被災直後は異臭も凄まじかったという。自宅は高台にあったため難をのがれ、工場は壊滅的な被害を受けていたが、保険金も支払われるので、公の支援を待たずに再建を始めているとのことだった。

弱者が取り残されないように

公の支援が遅れている中で、体力のある個人や企業は自らの力で再建し始めており、更地にポツポツと新しい家が建っている状況も見かけられた。経済的な格差がこのようにあらわれてくるということを実感させられた。

被災地の情報と変化に引き続き注視しつつ、弱者が取り残されることのないような支援が必要だと感じた。

(東京民医連事務局 村上絵理子)

共同組織もともに参加

今回ボランティアをした大船渡市は娘が大学在学中に三年間住んだ場所で、私も何度か行った場所でもありました。

見覚えのある風景が一変しているのに驚き、津波の恐ろしさを感じました。作業は二日間のみでしたが、暑さが厳しく、熱中症にならないようにしなければと常に思っていました。特に二日目は野外での側溝の泥かきの補助的な作業はとてハードで多少頭がクラクラし始めましたが、こまめに休憩が入り、水分を取り、体調を崩すこともなく無事に終了しました。

個人でも参加できるボランティアがほとんどないので、一組合員として参加させていただく機会をつくっていただき、少しですが役に立つことができよかったです。まだまだ復興には時間がかかる状況なので又機会がありましたら参加したいと思います。

(東京保健生協 西南支部 村上 なつ江)